

## 『伊勢物語』の古注釈

—『神風知顯正義集』から—

## 本文資料〔部分抜粋〕

1, よもあけばきつにはめなでくだかけのまだきになきつてせなをやりつる

これもかみのごとく古哥をいれたるなり。万葉集ミきつねといふ字をきつとよませたり。又云、みちの國にはふねのをもきをしきをきて、人をかんだうするには、そのふねのしたにいてわびしむるなり。かのふねをきつ船と云也。はめてとは、入をはむるといふかのくにの風俗也といえり。或云、昔は庭鳥をさとのきじとて、船フネすしにしてくひけるとかなんぞ申せども、此義おぼつかなく侍り。さるべしともおぼえず。たゞきつにくらはせでと心うべし。くだとは、宅鶏とかきてくだかけとよむ也。或又、祭時、くだといふ物を付なんぞこれを云。まだきとは、まだしき也。契夫とかけり。又男女ともかけり。〔下巻8ウ⑥〜9ウ⑤〕

2, くらべこしふりさげがみもかたすぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

をなじき物語の哥也。ふりわけがみとは、ゆはでふりわくるほどのかみ也。くびのまはりななんどのほどにこそ。たれかあぐべきことは、君ならでは男はせじと也。大國には、男はおほくて女はすくなきゆえに、女子ありときけば、男ゆいて、めにせんずるなりと、やくそくをす。女のをやだにうけつければ、男この女子の七歳になるとき来て、それがかみをふたつにゆいわけて、うしろにひきむすびて返る也。それをしるしにして、男ある女なりとて、らうぜきをせぬ也。

樂天筆云、爲君「薰衣裳」。君聞蘭麝ヲ不馨香。爲君事容飾ヲ。君見金翠ヲ無顔色」。

君と我身を給ていまだ五歳ならざるに、忽ニ牛女ニ隨とかけるは、此祭に事よせて云也。されハこれをおもひてよめる也。〔20ウ④〜21ウ⑤〕

『神風知顯正義集』下巻一帖は、『国書総目録』によると、「写本」天理図書館蔵(鎌倉末期写)、篁園竹内文平蔵(重美)【複製本】天理図書館善本叢書和歌物語古註集』43〔活字版〕和歌と新資料(松田武夫、昭和一八)となつてゐる。今、上記複製天理本に基づき考察することにする。

本書については、天理図書館の複製本に片桐洋一解題として、『和歌知顯集』と併記して記載する他に、勉強社文庫78に、松田武夫解題にて昭和十六年に本文翻刻したものが昭和五十五年に復刻されている。この古注釈書については、岩波書店『日本古典文学辞典』に見出し項目として記載が見えずじまいである。

さて、本書には、この前に上巻乃至中巻が存在したであろうし、この下巻一帖の内題の次に、「物語譚断簡事」と記載されていることから前半部には『和歌知顯集』のような「物語詞断簡事」があったのであろうかと推定する。現存する本書下巻部については、『伊勢物語』中の初段から最終段における和歌についての注釈書資料となつてゐる。奥書には、「異義ハ以先達之異説私加之ノ可秘々々穴賢々々」とし、本文上には、「或説云」「或云」「或記云」「又云」「或人難じて云」といった明確記載をさける形式でことばを記載説明する。これとは反対に、和漢の書物引用については、『風土記』『万葉集』『白氏文集』『漢書』『四条大納言髓脳』『拾遺集』『延喜御集』後撰集』『伊勢集』『貫之集』『古今集』『古今六帖』『源氏物語』等を実際に用いて歌の解釈をめざしているものである。さらに、佛書からの引用部分として、第六十七段の和歌「きのふけふ雲のたちまひかげろふははなのはやしとをしとなりけり」「…をうしとなりけり」について「業平哥也。花林をうしとは、むかし尺迦如来乃御入滅のとき、鶴林乃かれて、しろきはなのさきたるやうになりたりしハ、実の花ニあらず、これそら事のはななり。これハ御入滅

をなげくがゆへに、はなとミゆるままでにかれにき。それがごとくこのはやしも、けふもその日<sup>ニ</sup>あひあたりたるに、花ならず、はなのやうにミゆるは、今日の昔を思出でたちかくすかと也。花の林とよまんとて、たちまいとハ云也〔下巻46才⑦く47才③〕とあつて、涅槃會の内容を以て説明している。この典拠名についての明記はない。『三宝絵』下8「山階寺涅槃會」に、

釋迦如來涅槃<sup>しやくか</sup>ニ入ナムトオボシテ、摩迦陀國<sup>まかだこく</sup>ヨリ拘尸那城<sup>くしなじやう</sup>ニオホトリ、沙羅<sup>さらか</sup>ノ林<sup>りん</sup>ニシテ、薪<sup>たきぎ</sup>ツキ火<sup>ひ</sup>キエ玉<sup>たま</sup>ヒニキ。佛<sup>ほとけ</sup>ノ生<sup>なま</sup>レ給<sup>たま</sup>シ日<sup>ひ</sup>ヨリ昨日<sup>きのふ</sup>マデサカヘタル、梅檀<sup>せんたん</sup>ノ樹<sup>じゆ</sup>俄<sup>さか</sup>ニ枯<sup>かわ</sup>ヌ。佛<sup>ほとけ</sup>ノカクレ給<sup>たま</sup>シノチハジメテ、ケフゴトニミルニ、菩提樹<sup>ぼだいじゆ</sup>ノ葉<sup>は</sup>ミナ落<sup>お</sup>トイヘリ。心<sup>こころ</sup>ノナキ木<sup>き</sup>ダニ皆<sup>みな</sup>今日<sup>けふ</sup>シケレバ、恩<sup>おん</sup>ヲ忍<sup>しの</sup>ガタクシテ、昔<sup>むかし</sup>ノ今日<sup>けふ</sup>ニ金<sup>かね</sup>ノ床<sup>とこ</sup>ニオキキツ、仏性<sup>ぶつじやう</sup>常住<sup>じやうじゆ</sup>ノ理<sup>こと</sup>リヲアラハシテ、一切<sup>いっさい</sup>衆生<sup>じゆじやう</sup>ニハミ、ナ佛<sup>ほとけ</sup>ノタネアリ。皆<sup>みな</sup>マサニ佛<sup>ほとけ</sup>ニナルベシ。ト、キスルサセ給<sup>たま</sup>シ佛<sup>ほとけ</sup>ノ恩<sup>おん</sup>ヲムクユルヲ涅槃會<sup>ねはんかい</sup>トイフ也。〔新大系159頁〕

として、「梅檀の樹」が枯れるとするが、この典拠にあたる『大唐西域記』卷第八

金剛座上菩提樹者。即畢鉢羅之樹也。昔佛在世。高數百尺。〓經殘伐。猶高四五丈。佛坐其下。成等正覺。因而謂之菩提樹焉。莖幹黃白。枝葉青翠。冬夏不凋。光鮮無變。每至如來涅槃之日。葉皆凋落。頃之復故。

とあつて、「如來の涅槃の日に至る毎に(菩提樹)の葉皆凋落し、しばらくして故に復す」となっているので、(1)で採り上げる「羆の林」ではない。ただ、『涅槃經』卷第一に、

爾時拘尸那城沙羅双樹、其林變白、猶如白鶴

とあつて、釈迦入滅の時、白鶴のように白く變じて枯れたという沙羅楚樹のことを「羆の林」と呼称する事が見えている。また、觀智院本『三宝絵』中に、

鷲ノミネニヲモヒアラハレ、羆ノ林ニ聲タエシヨリコノカタ、迦葉ガ詞ヲ鐘ノ音ニツタヘ、阿難身ヲ鎚ノ穴ヨリイレリ〔新大系74⑫〕

と記載し、『増鏡』序にも

二月の中の五日は、つるのはやしにたき木尽きにし日なれば(略)拝みたてまつると見えている。時代は降つて、室町時代の古辞書である広本『節用集』(天地門)に、



「鶴林<sup>ツルノリン</sup>天竺佛滅処也」  
と記載する。このことから、本書の依據した資料が仏典である『涅槃經』に直接依拠していなくても、『三宝絵』などの二次的資料に基づく可能性もあろう。如何なものか。

第七十七段の和歌「山のミなうつりてけふニあふ事ハ春のわかれをとふなるへし」について「業平哥也。山乃ミなうつりてとは、尺迦如来御入滅のとき山野振動し、草木色變して、是彼御なごりををしミかなしむゆえ也。それかごとく此後も春のわかれにあひあたり給て、古今ことなれとん、悲歎をなしきよしをよめる也。問とは、とぶらふなり」〔53才⑦く53ウ⑥〕にも、同じように『涅槃經』卷第一・壽命品第一に「爾時大地諸山大海皆悉震動」と卷第二「見諸山河石壁草木宮殿屋舍日月星辰皆悉迴轉」からの引用が見られ、ここでは、「山野振動、草木色變」を記述する。この部分の引用については、必ずしも『涅槃經』を適確に引用したものは言えないので、後日改めて精査していくことにする。



